

最終号に寄せて

藤 原 正 道

短期大学部部長

今回の46号で、実践女子大学短期大学部紀要は、最終号になります。今まで投稿していただいた方、読んでいただいた方を始め、関係者の方々には心からの感謝を申し上げます。

本紀要は、自由な研究の発表の場として、本学部の研究の礎としての役割を果たしてきました。現代の研究論文は、その内容に普遍性、論理性、客観性が求められますが、実験による反証可能性を必須としない人文・社会科学では、それら全てを100%満たすことは不可能です。そこで、チャレンジングなアプローチで、発表する場として紀要の存在は、重要なものとなります。

現行の基準からは多少外れた仮説や、資料の収集にはかなりの時間がかかるため、裏付けは十分でないかもしれない仮説でも、発表する自由が紀要にはあっていいように思います。自由な議論こそが、知を進めるのではないのでしょうか。

紀要は、業績には含まないという意見も散見されますが、研究活動の年次または、中間報告としての役割もありますし、紀要として形にして、公にしない限り、研究成果として記録になりません。また、他の多くの研究者の目に触れることもありません。

昨今は真実よりも個々人に都合のよい、または心地よい物語の方が好まれる風潮があります。科学や真実は多数決で決まるものではありませんし、俗世間に迎合することなく、学問を探究することは、高等教育機関に属する研究者の使命でもあるはずです。

本紀要が研究に、または教育に貢献できたとしたら、投稿していただいた先生方にとっても、編集に関わってきた方々にとっても嬉しいことだと思います。今後とも皆様の益々のご活躍を願っております。